

令和 4 年 6 月 16 日現在

機関番号：33918

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2018～2021

課題番号：18K02144

研究課題名（和文）「地域記憶」づくりによる震災復興支援プログラムの開発と評価

研究課題名（英文）Development and Evaluation of a Disaster Recovery Support Program Using "Local Memories" Creation

研究代表者

伊藤 美智予 (Ito, Michiyo)

日本福祉大学・社会福祉学部・准教授

研究者番号：10594046

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,400,000円

研究成果の概要（和文）：本研究で取り上げる「地域記憶」とは、住民らから収集する写真等をもとに編集された地域住民の生活の変容を映す映像である。研究成果には次の4点がある。1) 地域住民や行政、介護サービス事業所等と連携し、「地域記憶」づくりを用いた地域介入プログラムを開発した。2) 本プログラムに参加することで「地域への愛着が高まる」等の影響がみられた。プログラムの有用性が示唆された。3) 地域住民を対象に「地域記憶」の上映会を実施し、9割以上が肯定的な評価であった。「地域記憶」の地域回想法ツールとしての有用性が示唆された。4) 他地域へ展開するため、「地域記憶」づくりの一連の手順やポイントを示したDVDを作成した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究では、被災地の地域コミュニティ再構築という社会的課題の解決を目指し、「地域記憶」づくりを用いた独創的な地域介入プログラムを開発した。このプログラムが参加者にポジティブな影響をもたらすことも確認できた。プログラムの持続性・応用可能性の観点から、1) 地域住民が参加しやすい活動内容、2) 低コスト、3) 地域づくりの拠点整備、4) ノウハウの言語化と手順書の作成などプログラム設計上の工夫を行った。今後、他地域でも応用可能な地域介入プログラムである。

研究成果の概要（英文）：The "local memories" that are the focus of this research are images that show the changes in the lives of local residents, compiled from photographs and other materials collected from the local residents.

The results of the study include the following four points: 1) A community intervention program using "community memories" was developed in cooperation with local residents, local government, and nursing care service offices. 2) Participation in the program affected "increasing attachment to the community." The program was found to be effective. 3) A "Local Memories" screening was held for local residents. More than 90% of the participants positively evaluated the program. 4) A DVD showing a series of procedures and key points was created to expand the program to other areas.

研究分野：社会福祉学

キーワード：地域介入プログラム プログラム開発 プログラム評価 地域回想法 地域づくり

1. 研究開始当初の背景

2016年4月、熊本地震が発生した。熊本地震を契機に、震災時における地域在住認知症者と家族への支援体制構築を目指し、熊本県A村との共同研究を開始した。地域全体の要介護者の流動、地域在住認知症者の避難場所の経時的変化を把握するとともに、安否確認や食事配達、入浴支援など、創意工夫のもと災害時特有の支援がされていた、認知症の軽度者ほど不安感が強いこと等を明らかにし、震災時ケアマネジメントへの示唆を得た。

同時に、1)生活不活発による新規要介護認定者の増加、2)地域の活力低下(人口流出増加)、3)行政や住民の疲弊など、被災地が直面する多くの課題も知った。一方で、1)住民のA村への深い愛着、2)震災後、介護事業所主導の地域ネットワークが形成されつつある、3)過酷な経験から前を向いて歩いていこうとする住民の姿など、復興に向けた自主的な地域づくりの萌芽も感じられた。

これらの要素を、既に地域介入の実績を有する地域映画づくりの活動と融合させることで、復興過程にある被災地を支援できないかと考え、本研究を着想した。地域映画づくりに準じた手法を採用した理由は、疲弊している地域住民にとって地域の記憶を紡ぐ作業が、1)地域の一体感を高め、2)地域への愛着や誇りを取り戻し、3)地域の昔と今の生活を振り返りこれからを考えるよい契機となると考えたためである。

なお、本研究の主題となる「地域記憶」とは、住民らから収集する写真などをもとに編集した地域住民の生活の変容を映す映像集(DVD)のことである。プログラムの持続性・応用可能性の観点から、地域住民が参加しやすい活動内容にするため、多くの住民らが所有しているであろう写真に着目した。「地域記憶」はその地域の歴史や文化、暮らしを映し出す文化的資産となり得るものである。

2. 研究の目的

中山間地の被災地では、少子高齢化に伴う諸問題に加え、人口流出の加速や地域コミュニティの分断などの課題に直面している。そこで本研究では、被災地の地域コミュニティ再構築のため、「地域記憶」を制作・活用する一連のプロセスからなる地域介入プログラムを開発し、その有用性を評価することを目的とした。

3. 研究の方法

研究フィールドは、熊本地震で大きな被害を受けた熊本県A村とした。地域住民、行政、介護サービス事業所等と協働で、本研究を推進した。とりわけ介護サービス事業所は、地域づくりの核となる拠点として位置づけた。

(1)「地域記憶」づくりを用いた地域介入プログラムの記述

「地域記憶」づくりを用いた地域介入プログラムを開発することを目的とした。1)「地域記憶」づくりのコンセプト、2)「地域記憶」の制作プロセス、3)「地域記憶」の内容の観点から地域介入プログラムについて検討し、プログラムを記述した。

(2)「地域記憶」づくりを用いた地域介入プログラムの評価 - 「写真を集めて語ろう会」の評価

「地域記憶」の制作プロセスにおいて、写真データを収集する場として企画した「写真を集めて語ろう会」について評価することを目的とした。「写真を集めて語ろう会」に参加した地域住民23名を対象とし、アンケート調査を実施した。「写真を集めて語ろう会」は2020年1-2月にかけて計3回開催した。1回あたり約90分であった。参加者には、事前に「地域記憶」のコンセプトを伝え、当日写真を持参してもらうよう依頼した。個人が持参した写真をもとに、どのような場面か、なぜ次世代に伝えたいか等についてグループで語り合った。終了後にアンケート調査を行った。調査項目は、「満足度」や「参加したことによる変化」、「今後の参加意向」、「参加した感想」などであった。

(3)「地域記憶」づくりを用いた地域介入プログラムの評価 - 「地域記憶」の地域回想法ツールとしての有用性の評価

地域住民らとともに制作した「地域記憶」(DVD)の地域回想法ツールとしての有用性について評価することを目的とした。具体的には、地域住民を対象とした「地域記憶」上映会を開催し、参加者へアンケート調査を実施した。

地域住民向け上映会は2021年4月に行った(約90分)。コロナ禍での開催であったため、参

加者数を限定し感染防止策を徹底した。上映会に参加した地域住民 36 名を対象にアンケート調査を実施し、全員から回答を得た（回収率 100%）。主な調査項目は、属性、満足度、参加したことによる影響、参加した感想、今後の活用方法などである。「制作委員」「写真を集めて語ろう会参加者」「上映会のみ参加」の 3 群にわけて分析した。

（４）他地域へ展開するための映像資料の作成

本研究成果の他地域への応用を進めるため、「『地域記憶』づくりプログラムの実際」として制作プロセスを解説した映像資料（DVD）を作成した。

4．研究成果

（１）「地域記憶」づくりを用いた地域介入プログラムの記述

1) 「地域記憶」づくりのコンセプト

地域の中で「地域記憶」づくりを進めていくうえで、コンセプトとして次の 5 点を挙げた。次世代に伝えたい地域の記憶を残す、地域住民の何気ない生活の風景を集める、手軽にいつでも鑑賞できるよう映像化する、時代ではなく地域を切り口とした回想法ツールを作成する、ツール作成から活用に至るプロセスそのものを地域づくりに生かす。

2) 「地域記憶」の制作プロセス

地域住民が共有する体験・記憶に着目し、地域住民、行政、介護サービス事業所等と連携しながら、「地域記憶」を制作した。「地域記憶」づくりは、制作委員会の組織化、写真等のデータ収集、写真・音源の選定、編集作業、活用、評価のプロセスからなった。

「地域記憶」の制作プロセスを地域全体の取り組みとするために、いくつかの工夫を行った。第一に、写真だけで伝わりにくいものについては、地域住民が写真を説明する映像も撮影し、スライドショーの中に組み込んだ。第二に、音源は地域になじみのある歌を使用した。具体的には、小学校歌や地域の歌謡グループによる歌唱を音源として採用した。第三に、地域住民がナレーションを担当した。そうすることで方言などの表現がその地域ならではの雰囲気醸成した。第四に、タイトル題字も地域住民が作成した。

3) 「地域記憶」の内容

上記のプロセスを経て完成した「地域記憶」は、次のパートで構成した。はじめに、家族・暮らし・遊び、生業・仕事、行事、自然・歴史、おわりに。計 60 分程度の映像集となった。

（２）「地域記憶」づくりを用いた地域介入プログラムの評価 - 「写真を集めて語ろう会」の評価

満足度では 9 割以上が肯定的な評価であった。参加したことによる変化として、「地域の当時の生活や文化について、次世代に伝えていきたいと思うようになった」「地域への愛着が高まった」「懐かしい気持ちになった」の項目で評価が高かった。今後の参加意向でも、全員が肯定的な回答であった。

参加した感想として、地域の歴史や文化について「生まれ育ったふるさとの古い歴史、生活の様子を伺い知ることができてよかった」、「地域の文化や伝統を後世へ伝えることは大切なことだと思う」等の意見がみられた。「毎回メンバーが変わるたびに昔話が楽しかった」、「思い出多い世代にかえらせてもらい若返った」等の声も聞かれた。「将来に残すべき事柄、資料の多さと消えた旧村の歴史の重みを感じた。子や孫へどこまで伝承できるか、年寄りの仕事が生まれた」といった地域の中での高齢者の役割への言及もみられた。

「写真を集めて語ろう会」は参加者にポジティブな影響を与えていたことから、地域介入プログラムとしての有用性が示唆された。

（３）「地域記憶」づくりを用いた地域介入プログラムの評価 - 「地域記憶」の地域回想法ツールとしての有用性の評価

上映会の満足度は 9 割以上が肯定的な評価であった。特に「写真を集めて語ろう会参加者」群で満足度が高かった。「制作委員」「写真を集めて語ろう会参加者」群で、「懐かしい気持ちになった」「次世代に伝えていきたいと思った」「元気な気持ちになった」「地域への愛着が高まった」の項目でより肯定的な評価であった。

参加した感想として、「忘れていた子どものころを懐かしく思い出した。小学校の先生や知り合いを見て胸が熱くなった」、「物が無い時代。何事も近所で助け合い行動していたことが懐かしかった。昔ながらの人と人のつながりを残したい」といった昔を懐かしむ声が聞かれた。また、「地域の歴史がよくわかる映像記録であった」、「この地域を大事にしていきたい」など地域への愛着の高まりを示す記述もみられた。「あの時代を過ごせたことを誇りに思う。あの頃があるから今がある。パワーが出た」「写真をきっかけに思わず会話・対話が始まること、そこで語られる内容に価値がある」などの意見も挙げられた。

今後の活用方法として、「サロン活動で使いたい」「老人会等で地域の方に見てほしい」「小

学生や中学生にも見てほしい」「子どもや孫と一緒に見てみたい」などの声が寄せられた。

以上より、「地域記憶」の地域回想法ツールとしての有用性が示唆された。「地域記憶」を用いた回想法的アプローチは、地域切り口にした記憶の想起であり、地域での共通の体験・記憶に着目した取り組みである。地域の良さを再確認し、地域への愛着が高まる機会となり得ることがうかがえた。今後、介護サービス利用者を対象とした回想法ツール、小中学生を対象とした地域福祉教育ツールとしての活用可能性を検討することが課題である。

(4) 他地域へ展開するための映像資料(DVD)の作成

「『地域記憶』づくりプログラムの実際」として、「地域記憶」づくりの制作プロセスを解説した映像資料(DVD)を作成した。はじめに、「地域記憶」づくりプログラムとは、「地域記憶」づくりプログラムの準備、写真の収集、写真の選定、映像(スライドショー)の編集、「地域記憶」の活用と評価、おわりに、で構成される30分程度の映像資料である。

研究成果の他地域への応用を進めるため、研究成果の実践現場へのフィードバックも行った。介護サービス事業所や社会福祉協議会など地域づくりに関心のあるものを対象に、「地域記憶」づくりの研究成果の報告を行い、映像資料を配布した。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計4件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 伊藤美智予, 中村裕子, 松尾弥生, 鈴木亮子
2. 発表標題 「地域記憶」づくりによる地域介入プログラムの開発
3. 学会等名 第21回日本認知症ケア学会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 伊藤美智予
2. 発表標題 「地域記憶づくり」による地域介入プログラムの開発と評価 - 地域を切り口とした回想法的試み
3. 学会等名 第28回日本介護福祉学会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 伊藤美智予, 中村裕子, 松尾弥生
2. 発表標題 「『地域記憶』づくりによる地域回想法的アプローチの検討 - 「地域記憶」の映像化に向けた取り組み」
3. 学会等名 第22回日本認知症ケア学会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 伊藤美智予
2. 発表標題 「「地域記憶」の地域回想法ツールとしての活用可能性 - 地域住民を対象とした上映会の評価」
3. 学会等名 第69回日本社会福祉学会
4. 発表年 2021年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------